

第27回全国読書作文コンクール対象図書

【小学生の部】



図書名 **みてろよ! 父ちゃん**

くすのき しげのり 著 定価 1404円(税込) 文溪堂

運動会の徒競走で1番になれるアキヨシ。でも、大工の棟梁であるお父さんは仕事で見に行けません。あーあ見てほしいな、父ちゃんに、1番でゴールテープをきる場所を。ライバルのカケルくんのところは、家族六人で応援にくるとのことです。ふてくされるアキヨシですが、運動会の前日、お母さんに連れられて行った小学校で、運動場のテントをたった一人で点検するお父さんの姿を見ます。アキヨシのことを思うお父さんは、自分なりのやり方で行動に移したのです。そして、それを決して誰にも自慢しようとはせず、黙々と仕事をやりとげます。アキヨシは、その後ろ姿からお父さんの考え方や、生きざまを学びます。お父さんの思いを知ったことにより、反発する気持ちが徒競走を頑張る気持ちへと変わります。親子の素敵な関係を描いた読み物です。



図書名 **夜やってくる動物のお医者さん**

高橋 うらら 著 定価 1296円(税込) フレーベル館

夜間往診の動物のお医者さんって知っていますか? 大切なペットが病気で苦しんでいる夜、かかりつけの動物病院に見てもらえないときに、電話で呼ぶと患者さんの家までやってくるお医者さんです。梅原英輝先生は、初めは動物病院に勤めて、犬やネコ以外にもウサギ、鳥、は虫類などたくさんの動物を診療していました。勤務していた病院が夜間受付もしていたので、夜、病気やけがをしたペットを連れてくる家族の方がどんなに多く、大変なのかをよく知ることになりました。そしていろいろな家を訪ねて治療するうちに、ペットの「命のみとり」をささえることもとても大切なことだと気づいたのです。死を前にしたペットが最期の日々をなるべく苦しみに過ごせるようにサポートすること、心細く不安な気持ちでいっぱい飼主さんに寄りそいながら診察すること。そのことを教えてくれたのは、犬のウェンディでした。動物の命も人間と同じように尊いものなのです。



図書名 なみだの穴

まはら 三桃 著 定価 1512円(税込) 小峰書店

「なみだの穴は風にはこぼれて移動する。丘にもあがるし、空にも流れる。ただし、それは必要としている人のところへだ。なみだの穴は、なみだをこらえている人のところへ流れていって、悲しみをすいとってくれるのさ」。泣くことをこらえている人の前に突然現れるという「なみだの穴」。父の転勤でとつげんの転校が決まり、クラスメートと別れることになった光太。大好きな甘い物をたってレスリングの練習にはげむ真矢。ひとり暮らしになったおじいちゃんを心配する未来。少年

野球でエースの兄と2軍の弟の心の葛藤。心がはげしく動くと、すぐになみだがあふれてしまう、泣き虫の幸三……。どこかで縁がつながる登場人物たち。そんな中で、がんばる子どもたちとなみだにまつわる6つの話。

【小学生・中学生の部共通】



図書名 チキン！

いとう みく 著 定価1404円(税込) 文研出版

めんどろなトラブルをできるだけ避けて生きてきたぼく、日色拓。転校生の真中凜さんは気が強く、言いたいことをはっきり言うタイプ。他人につっかかってばかりなので、クラスで浮いてしまっている。女子のリーダー、仙道さんからはとくにうとまれていて、そのたびにぼくは板ばさみになってしまう。関わりたくない心を見すかされて、ぼくは真中さんに「チキン」なんてあだ名をつけられてしまった。いちばんの被害者はぼくかもしれない！

被害者はぼくかもしれない！

いいたい事はなんだっていう転校生の真中さん。いっていることはまちがってないんだけど、正直うざい。だって、まちがったことなんてそこらじゅうに転がっていて、そういう中でぼくらはがまんしたり、見て見ぬふりをしたりして、毎日をクリアしているんだから。

おっとりした性格の日色の目から語られる、ユーモア満載の学校生活。ちょっと考えさせられて、さわやかな読後感のお話です。



図書名 不可能とは、可能性だ

笹井 恵里子 著 定価1512円(税込) 金の星社

3歳の時に事故で左手を失ったクロスカンリースキー・新田佳浩選手。パラリンピックで2つの金メダルを獲得した彼の半生を、夢をかなえるために大切な「10の言葉」ともにつづったノンフィクション。

☆著者・笹井恵理子さんからのメッセージ

この本は、障害をもった人が苦しさを乗り越えていく、いわゆる“根性物語”ではありません。誰にだって苦手なことやコンプレックスに感じることはあると思いますが、新田選手は、できないことは知恵と工夫で補えるものだと力強く言います。

彼の言葉は、障害の有無に関係なく、誰もが共感でき、前向きな気持ちになれるものです。私自身、彼への取材を通して、自分の中にあるマイナスな気持ちが、プラスのエネルギーへと変わりました。自分は周りの人より劣っているのではないか、そんな悩みを持つみなさんに読んでほしい一冊です。



図書名 幽霊少年シャン

高橋 うらら 著 定価1944円(税込) 新日本出版社

砂ぼこりを巻き上げ近づく竜巻。「ドドーン！」ざわめきが止むと、まるいレモン色の光が動き回り、「アイタイ アイタイ ナツカシイ トモダチ」という声が聞こえた——。竜巻に乗って大地の目の前に現れた少年シャン。「おぼっちゃまに会いたくてあの世から来た」と言う。ひよっとして幽霊!? シャンは言った。「幽霊といっても、そんじょそこらの幽霊とはちがいますよ。ちゃんと足もあるでしょう。地に足が着いている真

面目な幽霊、なんちゃって……」シャンに導かれ、大地は敗戦間近の「満州」（いまの中国東北部）へ。シャンは、70年以上昔の満州で日本人の家庭に使用人として雇われた中国の少年だった。満州への時間旅行を体験した大地がつぶやきます——「自分でよく考えず、人のいうことばかり聞いていると、とんでもない世の中になるって、よくわかった」。「満州のことを今の子どもたちに伝えたい」という体験者の思いを受け継ぎ、まとめた作品です。



図書名 サイコーのあいつとロックレボリューション

牧野 節子 著 定価1404円(税込) 国土社

ビートルズをリスペクトする暁は、バンドでのメジャーデビューをめざし、高校のなかまとロックバンドを組んでいる。だが、音楽への彼らのゆるい気持ちに物足りなさをおぼえ、じりじりしているところに、叔父の船上結婚式で、奇跡のような声を持つ光と出会い、バンドのボーカルとして迎え入れる。楽器のテクニックも抜群の光を中心に、演奏ナンバーや編曲をかえて、前のめりの暁に、しだいにメンバーの気持ちがさめていく。そして、学園祭目前に、「やめる」のメールが届く。急きよ、光とふたりの演奏にかえて臨んだ学園祭のステージは、拍手と歓声につつまれ大成功だった。いよいよめざすは、新人登竜門のコンテストだ。暁の気持ちははやるが、光に重大なアクシデントが！ さらに、いつも傍観者で、音楽に無関心に見えた父親の封印していた秘密が明かされて……。

音楽に賭ける少年の心意気と友情、父と心を通わせるまでのビートの効いた熱い物語。

【中学生の部】

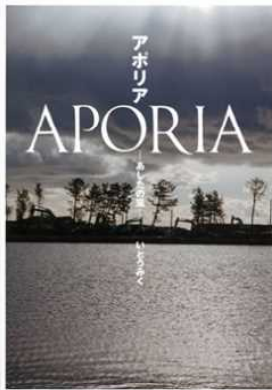


図書名 ケンガイにっ！

高森 美由紀 著 定価1512円(税込) フレーベル館

俊は小学5年生。父も母も忙しく、いつも夕食はひとりぼっち。学校でもほとんどひとりぼっち。両親が家にいないことをいいことに、部屋にこもってパソコンやスマホのオンラインゲームにどっぷり。夏休み、父の田舎で過ごすようにと両親に言われ、久しぶりに行ったばあちゃんちは……スマホが繋がらない！そこは通信圏外でコンビニもない、秘境のような田舎だった。「おくいじめや」というなぞの仕事をしているばあちゃん、漆職人の阿部さん、同じ学年のふたごの兄妹、剣太と亜紀。今までの人間関係にはない密度の濃さに、だんだんネットから現実の世界に面白さを感じている自分に気づく。そして、ふたごの妹、亜紀が拒食症に苦しむ姿を自分に重ね、俊はそっと見守り、応援する。亜紀ががんばれたら、自分もがんばれる気がする、と。俊の心の中でなにかが変わっていく……。

田舎で体験する、不思議となぞと情熱のひと夏をぜひ、読書体験で味わってください。

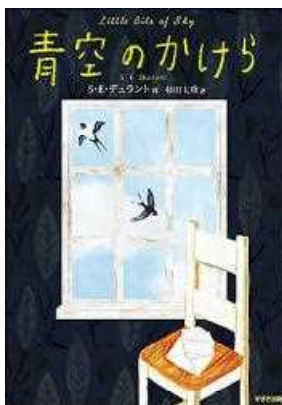


図書名 アポリア —あしたの風—

いとう みく 著 定価1620円(税込) 童心社

2035年春、マグニチュード 8.6、震度 7 の巨大地震が発生、津波が沿岸部を襲う。崩壊した自宅で生き埋めとなった母を救いだそうとする息子・一弥。通りかかったタクシー運転手・片桐が一弥をなぐって気絶させ避難を急ぐ。直後に大量の水が町をのみこんでいく。一弥は母親を助けられなかったことで片桐を憎む。だが自分が引きこもってさえいなければ母は家にいなかった、母を殺したのは自分ではないかと罪悪感に苦しむ。

避難先となった会社には、年齢も職業も異なる人たちが避難していた。一弥はそれぞれが抱える生身の人間としての弱さ、醜さを直視し、時にぶつかり合いながら、極限状況下でさらけだされる命の重さと向き合い、「生」への確かな手応えを求めて一步を踏みだしていく。忘れてはいけない3・11の記憶。あの日失われた命は、もっと生きるべき人ではなかったのか。なぜ自分は生き残ったのか。生きることの意味を問う物語。



図書名 青空のかげら

S・E・デュラント 著 定価1728円(税込) 鈴木出版

身寄りのない姉弟ミラとザックのいちばんの願いは「家族」ができること。幼いころから、預かってくれる人の家を転々としてきましたが、とうとう行く所がなくなり、児童養護施設スキリー・ハウスで暮らすこととなります。あとから来た子が次々ともらわれていくなか、ふたり一緒に引き取ってくれる人は現れません。施設の大人たちの愛情に包まれて暮らしながらも、年齢が上がれば養子になることがさらに難しくなると

わかっているミラは、あせる気持ちと寂しさでいっぱいです。2年近くが過ぎたころ、ふたりはマーサという女性から夏のホームステイに招待されました。最初はぎくしゃくしていたふたりとマーサですが、少しずつ打ち解けていきます。

どんなに悲しいことがあっても、空を見上げれば、雲の切れ間のどこかにきっと青空のかげらが見つかります。明日を見失いそうになったときに思い出して欲しい、愛と希望と信頼の物語です。